

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 9 月 5 日現在

機関番号：32518

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12456

研究課題名(和文) タスクを活用した Graded Readers の読書のデザインとその効果の検証

研究課題名(英文) Exploration of the pedagogical effect of reading Graded Readers integrated with language awareness tasks

研究代表者

水野 邦太郎 (Mizuno, Kunitaro)

江戸川大学・メディアコミュニケーション学部・教授

研究者番号：40320840

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、GR の読書を「意味」だけに焦点化するのではなく、「気づき仮説 (Schmidt & Frota, 1986)」に基づいて、「形式」への「意識高揚」を図りながらGR の読書を実践するために「ディクテーション」のアプリを開発した。このアプリを通じてどのようなタスクを体験させることができたかを報告する。一方、GR の読書において学習者に「形式」に注意を向けさせる前に、まず学習者が「意味」だけに焦点化して読み始め、読書を継続するには、中学校で学習する高頻度「1000語」に関する言語知識にある程度「習熟」していることが前提条件として必要であることを述べた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した「ディクテーション」のアプリは、ディクテーションというタスクを効果的に効率よく行うことができる。「〇秒前に戻る」「〇回リピートする」という機能を使い、聞きたい箇所を指定すると、その部分だけを自動でリピートして聞くことができる。学習者は「聴いて理解し書く」ことだけに専念することができる。一方、開発した「英検5級～3級のためのGR の読書サイト」には、英検5級～3級レベルのために書き下ろされた150の物語が蓄積されている。学習者は好きな物語を選び、True/False Questions を通して理解度を確かめ、互いに感想を交流できる。これらは広く日本の英語教育の現場で利用できる。

研究成果の概要(英文)：This study explored how to implement both ideas of reading Graded Readers (GR) to focus on meaning and “consciousness-raising” (Rutherford & Sharwood Smith, 1985) to focus on form. This “Form-meaning connections” approach was based on the “Noticing hypothesis” (Schmidt & Frota, 1986) to cultivate communicative capability. In order to facilitate learners to notice the connections between form and meaning of conventional expressions while reading the texts of GR, an app utilizing Excel was developed to come up with tasks of “dictation”. This report explains what dictation tasks were provided as “Form-focused instruction”. On the other hand, I argued that it is indispensable for learners to have learned the most frequently used 1000 words taught at junior high school, so they can begin and continue to read GR by themselves even if only focus on meaning.

研究分野：英語教育

キーワード：Graded Readers 語彙習得 形式と意味のペアへの識高揚

タスクを活用した Graded Readers の読書のデザインとその効果の検証

水野邦太郎

1. 研究開始当初の背景

Graded Readers (GR) の読書の意義は、学習者が「辞書に頼らずに読書ができる 98%以上が既知語」(Nation, 2009) で書かれた GR の読書を通して、物語という具体的な文脈の中で、慣習的な言語単位の「形式」とそれが表す「意味・機能」とを関係づけながら英文を「解釈」し、「既知語の使い方」の理解を深める学びを実践する点にある(水野, 2020)。

一方、教師は、学習者が GR の読書の中で出会う既知語の使い方の理解をいかに「効果的」に「促進」していけるか、という観点から GR の読書を通じた語彙学習の支援を考えることができる。換言すれば、GR の読書を通して既知語の使い方に関する「気づき」「発見」を促進する「触媒」(山岡, 1997)として機能する言語知識を、教師は明示的に学習者に教授する。そして、このような「形式焦点化教授 (Form-focused instruction)」を通して授与された言語知識を、学習者は「主体的に使う」ことを通して GR の英語表現を味わう (appreciate) 読書を実践し、既知語の使い方に対する「理解」を深め「定着」を図っていく。

このように、本研究は、GR の読書においてただ「意味」だけに焦点化するのではなく、英語の慣習的な言語単位の「形式」に焦点化した指導を組み合わせることによって「コミュニケーション能力」を養成する、という「形式・意味連結 (Form-meaning connections)」(VanPatten, 2004) の考え方に基づいた GR の読書を実践するための方法を探求する。

2. 研究の目的

水野 (2020) では、形式焦点化教授を組み合わせた GR の読書教育を「効果的」に実践するために、Oxford Bookworms(OBW) シリーズの英語コーパスを構築し(10 冊/stage で 60 冊)、OBW コーパスを使用基盤モデルの観点(タイプ頻度、トークン頻度、軸後スキーマの形成)から分析した。そして、その分析結果に基づき、慣習的な言語単位の「形式」に対する「気づき」や「発見」を、学習者が GR の読書を通して付随的に得られるには「言語意識化タスク」を開発する必要があることを述べた。そこで、本研究の目的は、慣習的な言語単位の「形式」への「意識高揚 (consciousness-raising)」(Rutherford & Sharwood Smith, 1985) を図るための「言語意識化タスク」を開発し、形式焦点化教授の方法を提案することにある。

3. 研究の方法

(1) GR をオンラインで読める読書環境の創出

コロナ禍の影響で、本学科の学生が GR を図書館から借りることができなくなり、オンライン上で GR を読める環境を構築しなければならなくなった。GR を揃えるために、

2020 年度の入学時のテストを参照した。テスト結果は、TOEIC の平均点が 300 点だった。その内訳は、学科全体の約 30% が 300 点未満で、約 50% が英検 5 級と 4 級レベルであり、約 50% が 3 級レベルだった。このテスト結果から、本学に入学してくる学生は「中学英語を卒業していない」ということ、すなわち、「英語力の土台」となる「1000 語」の語彙力が貧弱であることがわかる。

そこで、英検 5 級、4 級、3 級レベルの学習者のために書き下ろされた GR シリーズがなか調査し、出版社に許可をとり、約 150 の物語に True/False Questions をオリジナルに作成し(3 問/話で、全 450 題)、各問題に解答と解説をつけ、インターネット上で読みたいタイトルを読める環境を構築した。このサイトには、各学生の「読んだ総語数」が現在進行形でグラフで示されていく Reading Marathon というページを実装した。また、各学生の My page には「読んだ物語のタイトル」「読後の感想」「理解度テストの総合点」「理解度テストの正解の平均点」が学期を通じて記されていくようにデザインした。

(2) 言語意識化タスクを開発するための例文データ・ベースの構築

慣習的言語単位の「形式」とそれが表す「意味・機能」の関係づけを積極的に促すための「例文データ・ベース」を構築した。各例文に様々な文法項目のタグを付し、タグ検索で焦点化したい形式を有する例文を瞬時にデータ・ベースから引き出すことが可能になった。

(3) 言語意識化タスクの開発 ディクテーションのアプリの開発

各例文において、学習者に注意を向けさせたい形式の部分を()にする「穴埋め問題作成アプリ」を開発した。約 500 個の例文の穴埋め問題を作成した。そして、学習者が例文の「穴」を例文の「音声」を聞きながら「埋める」ディクテーションのためのアプリをエクセルを使って開発した。このディクテーションのアプリには、各例文を聞きたい回数だけ「連続して繰り返し聞く」ことができる「リピート機能」が実装されている。このリピート機能を利用することで、学習者は巻き戻しの作業をいちいちすることなく、ディクテーションに集中することができる。

4. 研究成果

2021 年度に、開発したアプリを活用して授業を行った。Reading の授業で GR の読書とディクテーションのタスクの両方を行う予定だったが、英検 5 級から 3 級レベルの学生にとって両方のタスクを行うことは彼らのキャパシティを超え、授業参加へのモチベーションを下げることにつながる危険性があったため、Reading の授業では GR の読書のみ絞らざるをえなかった。学生は、週一回の授業中(100 分)に GR の読書サイトにアクセスして GR を読んだ。

「読んだ量」は、A4 で「10 枚～15 枚/週」。Reading (前期)・(後期)を通じて、学生は A4 で平均約 250 枚の英文を読んだ。理解度テストの全体の正解率の平均は約 70% だった。

た。「書かれた感想」から「喜怒哀楽」を感じながら読んでいたことがわかった。そして、物語の今後の展開を予測しながら予測があたったかどうか確かめながら読んでいたことがわかった。投稿された感想は、サイト内で受講者同士が読み合いコメントし合うことを通して、物語に対する理解を深めることにつながったと思われる。

一方、開発したディクテーションのアプリは、TOEIC の試験対策の授業で「資格試験の鍵は語彙力にある」という考えに立ち利用した。TOEIC の英文の約 82%をカバーし、英語の話し言葉の 84%、書き言葉の 77%をカバーする高頻度「1000 語」で書かれた例文を約 500 個用意し、穴埋め問題を作成した。毎週、授業外と授業中に 150 ~ 170 近い例文をディクテーションした。一つの例文をディクテーションし終わると瞬時に自動採点され、間違った単語がフィードバックされる。例文の「穴」を正しく埋められたかどうかのフィードバックを通して、自分が有する言語知識を吟味し見直す効果を狙った。さらに、同じ例文において「穴」が占める割合を 20% 40% 60% 80%と多くしていき、学期を通じて最低 4 回は同じ例文を聞き書きとるようにスケジュールを立てた。学期末に行った全例文を対象にしたディクテーションの試験 (一つの例文につき穴が占める割合は 80%)の正解率の平均は約 60% だった。

TOEIC の試験対策の授業で、ディクテーションと GR の読書の両方を行う予定だったが、英検 5 級から 3 級レベルの学生にとって両方のタスクを行うことは彼らのキャパシティを超え、毎週取り組むディクテーションのタスクに対するモチベーションを下げることに繋がる危険性があったため、ディクテーションのタスクのみに絞らざるをえなかった。

本研究は、2017 年度に研究申請書を執筆していた時は、その時に所属していた大学の学生 (英検で準 2 級から 2 級レベル)を対象に、研究目的と研究方法をデザインしていた。2018 年度から本学に異動し、学生の英語力がリメディアル教育を必要とするレベルとなり (TOEIC の平均点が 300 点、学科全体の 約 30% が 300 点未満、約 50% が英検 5 級と 4 級レベル、約 50%が 3 級レベル)、さらに、コロナ禍において GR の読書をオンライン上で成立させるための様々なアイデアや工夫を重ねることに重点を置かなくてはならなくなったため、2017 年度にデザインした研究目的と研究方法をデザインし直す必要性が生じた。

GR の読書を可能にする中学で学習する「1000 語の語彙力」という「土台」のないところに、ディクテーションによる「言語意識化タスク」と GR の読書を軸に据えた「4 技能統合型のタスク」という 2 つの「柱」を立てることはできなかった。そのため、「1000 語」を既知語にし、「1000 語」の使い方の「習熟」を図るためのアプリを開発して授業を行い、GR の読書を授業外で一人で行えるための「土台づくり」に重点を置いた。開発した「英検 5 級から 3 級のための GR の読書サイト」「言語意識化タスクを開発するための例文データ・ベース」「ディクテーションのアプリ」が、今後、日本全国でリメディアル教育の課題に取り組んでいる大学で、さらに、中学校と高校で、「1000 語力」という GR の読書を可能にする「土台づくり」を効果的に行う上で役立つように、これらのアプリを改善し普及させていきたい。そして、「ディクテーション」という「言語意識化タスク」を通して英語の様々な

慣習的言語単位の「形式」への「意識高揚」を図りながら，GR の読書を軸に据えた「4 技能統合型のタスク」を行う授業の実現に向けて，引き続きチャレンジしていきたい。

【参考文献】

Nation, I. S. P. (2009). *Teaching ESL/EFL Reading and Writing*. New York: Routledge.

Rutherford & Sharwood Smith. (1985). *Consciousness-raising and Universal Grammar* *Applied Linguistics*. 6 (3): 274-282.

Schmidt, R., & Frota, S. (1986). *Developing basic conversational ability in a second language: A case study of an adult learner of Portuguese*. In R. R. Day (Ed.), *Talking to Learn: Conversation in Second Language Acquisition* (pp.237-326). Rowley, MA: Newbury House.

Schmidt, R. (2001). *Attention*. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and Second Language Instruction* (pp. 3-32). Cambridge: Cambridge University Press.

水野邦太郎. (2020). 『英語教育における Graded Readers の文化的・教育的価値の考察』くろしお出版.

山岡俊比古 (1997). 『第2 言語習得研究 新装改訂版』東京：桐原書店 .

【研究代表者】

水野 邦太郎 (MIZUNO, Kunitaro)
江戸川大学 マスコミュニケーション学部 教授
研究者番号：40320840

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 水野邦太郎	4. 巻 29
2. 論文標題 学習指導要領の変遷からみた「言語能力観」の考察と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本英語コミュニケーション学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kunitaro Mizuno	4. 巻 1
2. 論文標題 Type and token frequency of conventional linguistic units in Extensive Graded Reading	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Extensive Reading	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kunitaro Mizuno	4. 巻 2
2. 論文標題 〔学会誌発表〕（計1件） Exploration of the pedagogical value of “graded” in Graded Readers	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Extensive Reading in Japan	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 水野邦太郎	4. 巻 12月号
2. 論文標題 言語使用の観点からみた学習指導要領の「4技能」再考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 水野邦太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 『英語教育におけるGraded Readersの文化的・教育的価値の考察』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

水野邦太郎. (2020). 『英語教育におけるGraded Readersの文化的・教育的価値の考察』くろしお出版 は, 2021年度 日本英語コミュニケーション学会 学会賞・学術賞を受賞した。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------